「鶏口（けいこう）」と「鰯（いわし）の頭」

昨日から三者懇談が始まりました。三年生にとっては、受験する学校を決定する懇談となりますね。一、二年の時には経験しなかった緊張を感じているのではないでしょうか。

先日、今年度の第二回の進路希望調査の集計結果が新聞発表されました。この辺りの公立高校でいえば、TK高校とE高校の進学を希望する者が多いようです。定員を大きく上回って、ましたからね。この現象は、今年度に限ったことではありません。この二校が、定員を超える常連校になっています。これはなぜでしょうか。

いろいろな理由が複雑に絡み合ってのことでしょうが、この二校に進むことが、自分の進路が最もイメージしやすいからではないかと私は思います。「その学校で頑張って勉強し、三年後には大学に行って、将来～になる」というように、青写真が最も明確になる学校が先の二校だと思われているからではないでしょうか。理想を現実にするためにふさわしい学校として先の二校が選ばれるから、今の時点で希望者が多いのだと私は思います。

しかし、理想はあくまでも理想。自分の力や適性といった「避けられない現実」が見えてくると、進路変更せざるを得ない者が出てきます。今は大幅にオーバーしている希望者数が、徐々に定員数に近づいてくるのはそのためです。

これは、TK高校やE高校に限ったことではありません。「この学校で部活をやって、全国大会に出て、将来プロになる」という青写真を描いている者は、全国に名の知れた有名私立高校に進学したいと思うものです。

そういう青写真は大切にしたいですね。目指すものがはっきりしているのは、若い時ならではのことであり、可能性の出発点だと思うからです。そういう思いをもっている生徒を、私は大いに応援します。その一方で、次のようなことも思っています。

本日の三年B組の黒板に、目を引く言葉が書かれていました。

「……その選択（どの高校に進学したか）がベストかどうかわかるのは、いつでしょうか。それは三年後、高校を卒業する時です。」

高校に入る前は、順調に頑張る自分しかイメージしないので、その高校に入ることばかりを考えるものです。しかし、大切なのはその先にあります。その学校で、自分の可能性を最大限に伸ばすことができるかどうか……それが最も大切なことです。

私は、数多くの教え子を先の二校に送りだしました。もちろん順調に伸びた生徒もいれば、希望から遠ざかってしまった生徒もいます。だれがそうなるかはわかりません。だからこそ、日本には「鶏口となるも牛後となるなかれ」「鯛の尾より鰯の頭」というような言葉があります。「鶏口」と「鰯の頭」が例えるものは、「自分のよさが発揮できる環境」のことです。高校も大学も経験した者として、私はそう思いますけどね。

（十二月七日　記）